

酒匂川で採れたリングガイについて

石 原 龍 雄

On *Ampullarius* Collected at Sakawa River, Odawara

Tatsuo ISHIHARA

1984年8月8日に、酒匂川下流において、みなれぬタニシの幼貝を採集した。この採集地は、1981年より定期的に観察を行っており、今回始めて出現したものと思われる。その後の調査で成貝を得て、俗にジャンボタニシ、リングガイと呼ばれているものであることがわかった。これらは、熱帯、亜熱帯地方の原産といわれ、生育が早く、味も良好で、しかも野菜くずなどで簡単に飼育できることから、近年養殖が盛んになっている。国内ではすでに数百社の養殖業者があるといわれ、箱根でも温泉の余熱を利用した養殖が試みられている。現在、ジャンボタニシに関する資料は養殖に関するものばかりで、産地、種名についてはかなり混乱している。酒匂川に出現したものは、アルゼンチン原産のラブラタリングガイ *Ampullarius insularis* ではないかと思われるが、確定するに至っていない。

採集された貝の最大の個体は、殻径51mm、殻高57mm(図1)であった。8月8日にはすでに卵塊が認められ、水面上20~80cmのアシの茎、コンクリートに、鮮桃色の卵塊(図1、右)が産みつけられていた。卵径は2.5~3mm、大きな卵塊では約500個の卵数をみた。

11月2日に酒匂川で採集した卵塊を、約20°Cの室内においたところ、殻径2.0~2.3mmの稚貝を得た。また、成貝を18~20°Cで飼育したところ、11月18、29日に産卵した。養殖関係の資料によれば、本種の繁殖力は旺盛で、生息水温の下限は2°Cともいわれ、酒匂川での定着の可能性は強い。問題は、台湾で養殖場から逃げだしたものが繁殖し、稲を食害したことから養殖禁止となったことで、日本でも被害を懸念する声がある。

今回酒匂川に出現した場所は、上流に瀬があり、ここ数年の増水の状況から、自然状態で水田地帯に侵入する可能性は少ないと思われる。しかし、何らかの方法で水田地帯に侵入した場合には、水温は低いものの、害貝となる可能性が全く無いとはいえない。

養殖の普及に伴い、こうした逸出、野外繁殖の例は、ますます増えると思われ、今後の調査の進展のために、断片的な観察であるが、ここに報告させていただく。おわりに、御多忙のなか、リングガイについてお教えいただいた、東海大学海洋学部波部忠重教授に厚く御礼申し上げる。

(大涌谷自然科学館)

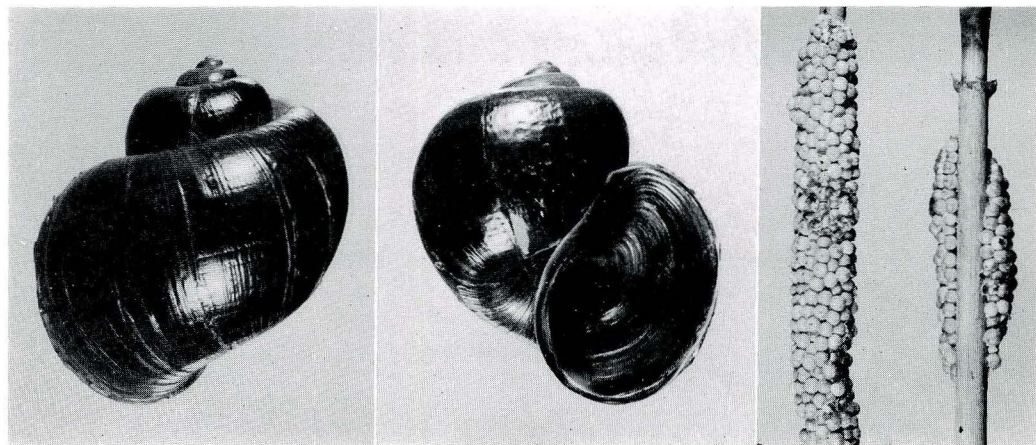


図1 リンゴガイ（左）とその卵塊